

古代日本海域の港と交流—北陸（石川県）の場合—

和田 龍介（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

1 はじめに 文献史料中には、加賀（旧越前）国・能登（旧越中）国でいくつかの津湊が記載されているが、遺跡との一致を見ている例はほぼないと言ってよい。それは津湊関連遺跡の調査・抽出の困難さ的一面を映しているわけだが、今回の報告である、金沢市臨海部に展開する津湊関連遺跡の事例を検討することで、津湊の動態・発展の一例として今後の調査に資することができればと考えている。

2 津湊関連遺跡の調査事例 何をもって津湊関連遺跡と認定するか、の原則が確立されていないのが現状であり、特に港湾管理施設のような、他の官衙関連施設と性格が重なるような遺跡に関しては津湊関連遺跡と考えられていない例が多いのではないかと考えられる。津湊関連遺跡の指標となるものの抽出が必要である。

3 県内の津湊関連遺跡の事例 金沢市戸水C遺跡は、大野川河口に位置する9世紀中頃～後半に盛期をもつ遺跡であり、加賀立国に伴い整備された、加賀国津ないし加賀国府津と考えられている。官衙的配置を有する建物群・官衙関連遺跡に通有の遺物（木簡、施釉陶器、硯等）・津の存在を示唆する文字資料（「津」墨書土器）・周辺に宿家・庄園・祭場遺跡が存在するなど、よく津湊としての特徴を備えており、津湊遺跡の指標となりうる遺跡・遺跡群として評価できる遺跡である。

金沢市畠田・寺中遺跡は犀川河口に位置し、8世紀初頭～後半に盛期をもち、西側に同時期の遺跡である金石本町遺跡が存在する。多数の「津」墨書土器・津湊を管轄する施設を示唆する「津司」墨書土器の出土、郡符木簡2点を含む、11点の木簡などから、8世紀代の加賀郡津として整備・発展したものと考えられる。

4 津湊の移動 7世紀後半～8世紀前半代に、犀川河口の金石本町遺跡、畠田・寺中遺跡が加賀郡津として順調に発展を遂げるが、9世紀中頃、特に加賀立国（823年）以降になると戸水C遺跡が盛期を迎える。これに呼応するかのように畠田・寺中遺跡は中心が東側に移動（庄園的な様相？、畠田B遺跡と関連するか？）し、金石本町遺跡は継続するものの規模が縮小するという動態を見せている。これは北加賀地域の物流の拠点が犀川から大野川（河北潟）に移ったことを示しており、2つの可能性が指摘できる。

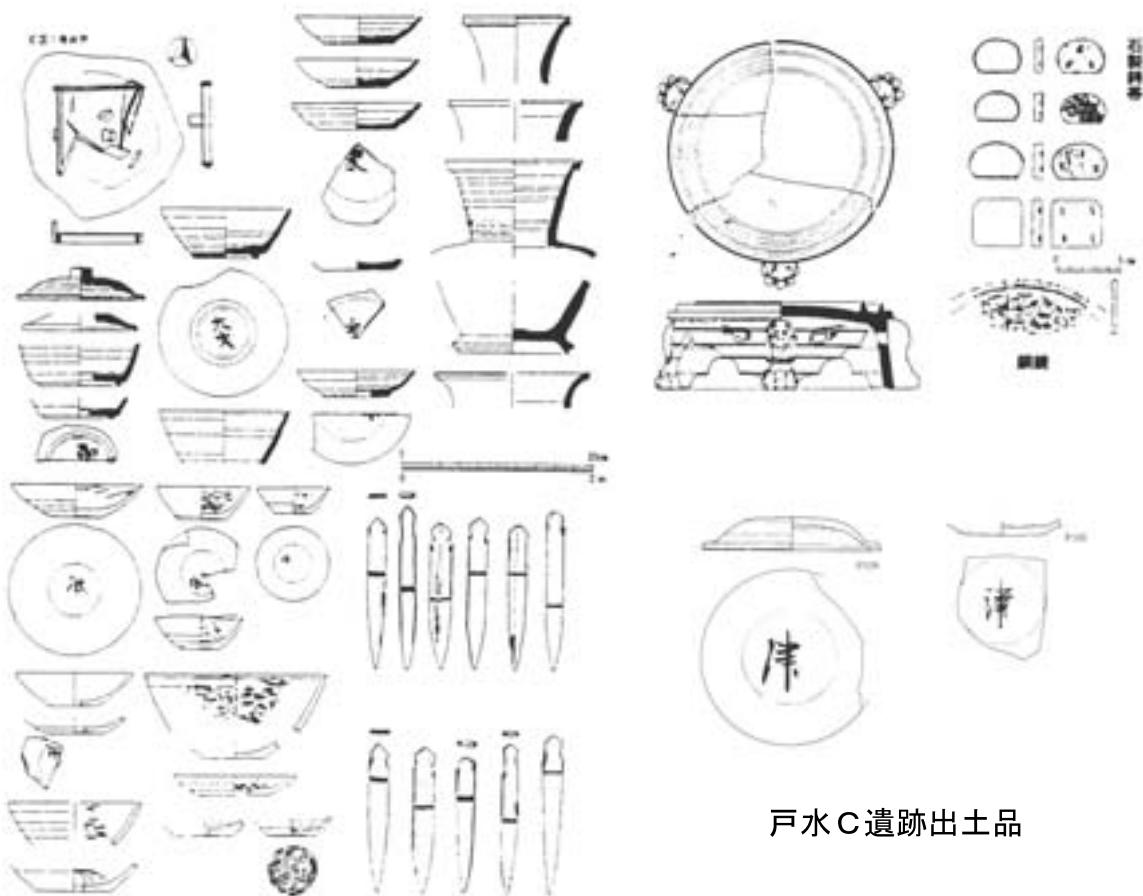
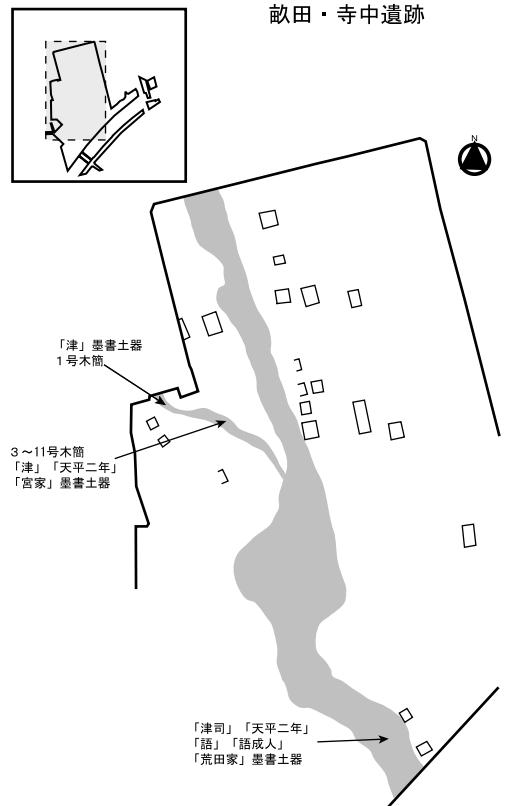
- ①河北潟を取り込んだ、新しい北加賀エリアの内水面交通の発展・整備に伴い、より河北潟へのアクセスが至便な戸水地域が開発された。
- ②自然現象（犀川河口部の地形変化）により、これまでの郡津が使用できなくなった→新たに大野川河口部に津湊を新設。

参考文献 『北加賀の古代遺跡』2004（石川考古学研究会々誌47号）

戸水C遺跡

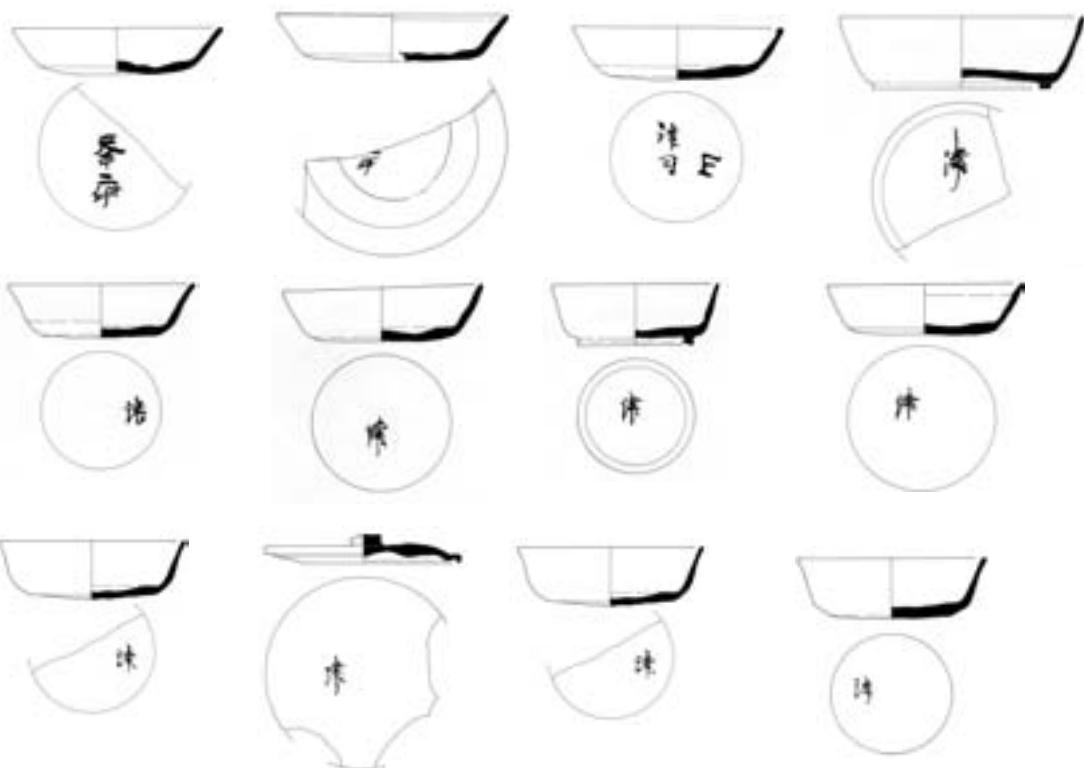


畠田・寺中遺跡



戸水C遺跡出土品

畠田・寺中遺跡出土品



1号木簡

